

# 活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2023年度）	208
購入文献解題	219
所員自著紹介	220
ニューズレター	223

# 共同研究グループ活動報告（2023年度）

## 日中関係史

2023年度は、対面とオンライン会議を併用しながら研究会を開催した。研究会の記録はすべて <http://chineseovers.jugem.jp/> に掲載している。

以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

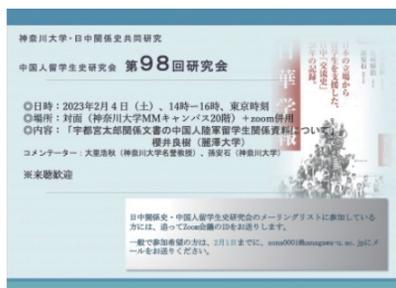
### (1) 第98回研究会

◎日時：2023年2月4日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎報告：「宇都宮太郎関係文書の中国人陸軍留学生関係資料について」櫻井良樹（麗澤大学）

コメンテーター：大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、孫安石（神奈川大学）



### (2) 第99回研究会

◎日時：2023年2月25日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎内容：

- ・「『杏壇新史』 Wechat から見る中国の教育史研究の現段階」譚皓（天津大学教育学部、『杏壇新史』 Wechat 公衆号運営メンバー）
- ・「清末東京高等師範学校卒業生の在華教育活動について」黄潔萍（中国・中山大学博士課程、神奈川大学外国語学研究所海外招聘研究員）

### (3) 第100回研究会

◎日時：2023年4月1日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎報告：若手研究者による研究テーマ交流会

- ・「同仁会の医療活動研究」王格格（中国・南京医科大学、医学史研究中心）
- ・「近代江西省における中国留日学生と医学校の創設」梁驍（千葉大学、D1）
- ・「清末における唱歌の受容と『音楽学』の出版」呂政慧（名古屋大学、D2）
- ・「1960年代の日・中教育学術交流」樊怡舟（広島大学、高等教育研究開発センター研究員）
- ・『清議報』と翻訳・掲載された日本語記事について」古谷創（明治大学、M1）
- ・「清国陸軍留学生の留日経験」張希（中国・中山大学歴史学系、D2）

(4) 第 101 回研究会

◎日時：2023 年 4 月 22 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎報告：広島で被爆した中国人留学生について（西本雅実氏，中国新聞元記者）

司会：川崎真美

コメンテーター：周一川（日本大学，元教授）

(5) 第 102 回研究会

◎日時：2023 年 6 月 10 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 11 階）+ zoom 併用

◎報告：法政速成科の中国人留学生と笈克彦（李曉東，鳥根県立大学）

一司会：見城悌治（千葉大学）

一コメンテーター：高田幸男（明治大学）孫安石（神奈川大学）

(6) 人文学研究所シンポジウム（第 103 回研究会）

◎日時：2023 年 9 月 16 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 11 階 50032）+ zoom 併用

◎報告：「音楽分野の日中関係史を考える」

・「清末における唱歌の受容と『音楽学』の出版」呂政慧（名古屋大学，D2）

・「1910～1920 年代の北京の音楽界と中国人留学生」鄭曉麗（中国・浙江音楽学院，専任講師）

◎コメンテーター：尾高暁子（東京芸大，講師）



(7) 第 104 回研究会

◎日時：2023 年 12 月 9 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 1 階・米田吉盛記念講堂）+ zoom 併用

◎報告：(1) 「関東大震災における中国人虐殺事件——国際労働力移動の観点から見る」川島真（東京大学教授）

(2) 関東大震災と中国人留学生」孫安石（神奈川大学教授）

(3) 「川島真氏，孫安石氏に対するコメントと報告」見城悌治（千葉大学教授）

（文責 Son ansuk（孫安石））

## 言語変異研究

### 1. 今年度の主な研究内容：

今年度は主に次の 4 つのテーマに関するデータ収集，整理，分析と執筆活動を行った。

①中国語の標準化・近代化に関する生態言語学的研究

- ②記号論の視点から見る美術の表現・表象と言語学の意味・含意とのかかわり
  - ③モダリティ・ポライトネスに関する日中異文化語用論の考察
  - ④中国における「国語」という概念の成立, その語彙的意味の変化および南北朝時代(439~589年)からの中国語と西北部の異民族言語との多言語接触の研究
2. 今年度の主な研究成果:  
論文執筆「中国語の語彙近代化の生態言語学的考察——新語の群生と「適者生存」のメカニズム」『歴史言語学』(第12号)日本歴史言語学会(2024年12月刊行予定)。
  3. 今年度購入した主な研究所蔵資料:  
『中華大蔵経 続編 19~31 漢傳注疏部(二)』(全12冊)
  4. 次年度以降の主な研究計画:  
著書『日中異文化の語用論——モダリティ・ポライトネスの諸相』の執筆。

(文責 彭国躍)

## 〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
  - 2022年度第3回研究会  
(2022年度になるが, 昨年度の活動報告に組み入れられなかったので, ここに報告する)  
開催日: 2023年3月23日  
会場: オンライン&対面(みなとみらいキャンパス17017)  
発表者(所属):

村井まや子(本学外国語学部 英語英文学科教授)

「Making a Multispecies Fairy Tale Library」

文学のふるさととも言うべき民話から始めて, 物語論そして民俗学の見地も導入しながら, 既存の人間中心主義的・男性中心主義的な分類を脱し, 現代のジェンダー論的, 多種共存的な見地に適合する形でのおとぎ話分類法へ導く議論であった。イソップ寓話など, 動物をたとえとして人間に教訓を与えるかのような寓話もまた, 動物そのものの物語として読みかえることも可能であり, 竜退治という物語が, 女性を犠牲者と受動性によって特徴づけたジェンダーバイアスによって, 特権的な位置を与えられてきた歴史も無視してはならないだろう。こうした問題点をふまえて提案された分類法について, とりわけ最後のカテゴリー「複数種の社会」を映し出す物語は, 主人公や登場人物(動物)どうしの関係に還元されがちなおとぎ話分析に, コミュニティという観点を導入するという点で鋭い指摘であった。

熊谷謙介(本学国際日本学部 国際文化交流学科 教授)

「倒錯 perversion か侵犯 subversion か? —— フランス世紀末女性作家ラシルドと動物愛」

フランス世紀転換期の女性作家による動物表象はコレット(『クロディーヌ』シリーズなど)に代表されるが, 男装も実践していた特異な作家であるラシルドによる『動物女』という作品に焦点があてられた。動物的本能のままに生き, 故郷を追われた女性主人公が, バリで雄猫と出会い, 愛し合い, 壮絶な最期を遂げるというこの作品が, 女性=動物というステレオタイプや動物性愛, ケアといった観点から読み直された。女性と猫の間に, 人間・男性を排除した理想の恋愛関係が打ち立てられ, 倒錯 per-

version や病理と解釈される余地を残しつつも、既成の性秩序の侵犯 subversion, さらには女性の解放の契機を示唆する物語という解釈が提示された。他方、相互にケアしあう両者の関係に潜む暴力もまた無視できないという論旨であった。

- 2023 年度第 1 回研究会

開催日：2024 年 3 月（予定）

会場：オンライン&対面（みなとみらいキャンパス 17017）

『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』書評会

2024 年 2 月に発行予定の本研究グループ叢書『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』（村井まや子・熊谷謙介編著、青弓社）の発刊を記念して、執筆者から発言をいただくとともに、全体の枠組みや今後の展開もふまえて議論をする予定である。

## 2. シンポジウム

なし

## 3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』を 2020 年 2 月に出版したが、その後が続く企画として、2020 年度から「動物」や「種」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。

2023 年 3 月 23 日に行われた 2022 年度第 3 回研究会では、村井まや子、熊谷謙介による発表が行われ（内容については上記参照）、この二つの発表を手掛かりとしつつ、2023 年度に本研究会から動物・種とジェンダーの関係をめぐる叢書を作るという方針が正式に立てられた。

2023 年度に入り、叢書出版に向けて出版社との調整、各論、また序論の執筆に尽力した。2024 年 1 月現在、最終校正を行っており、2024 年 2 月に青弓社から「神奈川大学人文学研究叢書第 50 巻」として発行予定である。以下に内容・目次を掲載する。

神奈川大学人文学研究叢書 50

『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』

村井まや子（編著）／熊谷謙介（編著）

A5 判 280 ページ 定価 3000 円＋税

### 【紹介】

民話やおとぎ話の動物と人間の関係、寓話やファンタジーに登場する精霊、狩猟と男性性、冒険物語を脱構築する動物——それらを文学や芸術はどのように描いてきたのか。大江健三郎、多和田葉子、松浦理英子たちの現代の「動物作品」は何を表象しているのか。

動物が人間よりも劣位に置かれる文化・構造を踏まえ、人間中心の視点を脱し、複数種（マルチスピーシーズ）の絡まり合いから作品や表象を読み解く。これに加えて、女性が男性から差別される非対称性に基づき、ジェンダーの視点も重ね合わせて多角的に分析する。

人間と動物を対立させる価値観を退け、エコクリティシズムやポストヒューマンの思想の潮流に棹さしながら、動物表象に潜む力学を浮き彫りにする。動物や人間、精霊をめぐる物語の森に分け入り、マルチスピーシーズやジェンダーなどの複合的な視野で作品の可能性を浮上させる新たなリーディングの地平。

### 【目次】

序文 マルチスピーシーズ物語の森のマッピング 村井まや子／熊谷謙介

## 第1部 記された〈動物〉と〈性〉

第1章 共苦による連帯とその失敗——大江健三郎「泳ぐ男」における性差と動物表象の関係を手がかりに 菊間晴子

第2章 多和田葉子の動物演劇の試み——『夜ヒカル鶴の仮面』から『動物たちのバベル』へ 小松原由理

第3章 皮膚感覚的快樂の果てをめざして——松浦理英子『犬身』論 熊谷謙介

第4章 マルチスピーシーズおとぎ話研究序説 村井まや子

## 第2部 多様な種の文化表象へ

第5章 銃を持つダイアナ——世紀転換期アメリカにおける狩猟とジェンダーをめぐる言説 信岡朝子

第6章 オーストラリア児童文学におけるアボリジナル文化——精霊の表象を手がかりに 鈴木宏枝

第7章 モクモク村のQちゃん——「野生」と「男性性」のクィア・リーディング 菅沼勝彦

第8章 ワクチンとしての物語——章夢奇のドキュメンタリー作品における女性の語りを手がかりに 秋山珠子

<https://www.seikyusha.co.jp/bd/isbn/9784787292759/>

2023年度第1回研究会は、叢書出版後、2024年3月に書評会として開催予定である。

(文責 熊谷謙介)

## 自然観の東西比較

今年度は、諸般の事情により活動は休止状態であった。

(文責 上原雅文)

## 日中韓対照言語研究

年2回以上、研究会を開催し、研究の活性化を図っている。メンバーによる発表に加え、海外の研究者にも参加を呼びかけている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも発表を呼びかけている。

今年度は下記の日程で研究会の開催を予定している。

研究会の開催

(1) 日 時：2024年2月20日(火) 15:00~17:00(予定)

場 所：Zoom

発表者：高木南欧子(本学国際日本学部国際文化交流学科教員)

テーマ：OPI データから見た漢語の使用

——中級、上級、超級の韓国語母語話者の発話から——

(2) 日 時：2024年3月14日(木) 15:00~17:00(予定)

場 所：Zoom

発表者：尹聖楽(本学国際日本学部国際文化交流学科非常勤講師)

テーマ：日本語の「なら」と韓国語の「-다면 **tamyen**」の対照分析

(文責 尹亭仁)

## 各国近代文学の研究

共同研究グループ名：各国近代文学の研究

### 1. 講演会・研究会の開催

叢書『翻訳としての文学』刊行に向けた研究会（報告会）

開催日：2023年8月14日

会場：ZOOM 開催

講演者：古屋耕平，岡部杏子，吉田遼人，中村みどり，山本亮介，松本和也

演題：『翻訳としての文学』寄稿論文についての現状報告

### 2. 活動内容

本研究グループは、活動8年目となる。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。

今年度は、これまでの中仕切りとして、叢書の刊行を企画した。「翻訳としての文学」という、総合テーマに向けて、それぞれの研究領域からの議論を集積した研究書を織りあげたため、7月に改めて執筆予定者の要旨をまとめ、8月には、準備状況の報告会を行った。以後、論文の執筆、校正作業にあたり、年度末に研究成果を公刊した。

（文責 松本和也）

## 知覚認知システムの普遍性と多様性

### 1. 講演会・研究会の開催：なし

### 2. シンポジウム開催：なし

### 3. 活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

（文責 吉澤達也）

## 学びの見える化

『学びの見える化の理論と実際』を読み解く会（公開研究会）の実施

『学びの見える化の理論と実際』（勁草書房、2023）が発刊された。本書は、「職場や学校で獲得すべき能力を明瞭化する」という趣旨に基づき、各分野における教育イノベーションに向けた一石を投じるものである。しかし、学びによって「人」や「組織」が本当に変わりつつあるのか、当初の願いやねらいが実現しているかなど、教育現場では「学びの見える化」が十分ではない。そこで、神奈川大学人文学研究所を起点に、下記の研究会を実施した。本書で描かれた各分野の「学びの現場」の理解を深めるための「叢書の読み解き会」を行った。

### ○なぜ学びを見える化するのか？ 見える化の方法論

日時：5月13日（土）9時～11時

講師：森和夫（一般財団法人職業教育開発協会代表理事）、西村美東士（聖徳大学児童学部元教授・現非常勤講師）、齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部教授）

コーディネーター：齊藤ゆか

○行政・非営利組織における学びの見える化実践

日時：6月10日（土）9時～11時

講師：長浜洋二（モジヨコンサルティング代表）、山本直輝（公益財団法人ハーモニイセンター理事）、齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部教授）

コーディネーター：西村美東士

○企業・開発教育における学びの見える化実践

日時：7月8日（土）9時半～12時

講師：岩堀嘉仁（トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部組長）、森和夫（一般財団法人職業教育開発協会代表理事）

コーディネーター：森和夫

○学校における学びの見える化実践

日時：9月9日（土）9時半～11時半

講師：小桐間徳（神奈川大学理事長付特別審議役）、鈴木英夫（神奈川大学法学部教授）、太田早織（神奈川大学人間科学部助教）

コーディネーター：西村美東士

○開発・病院等における学びの見える化実践

日時：10月14日（土）16時～18時 ☆（時間帯変更）

講師：安藤めぐみ（株式会社コーエイ・リサーチアンドコンサルティング）、大瀬恵子（一宮研伸大学看護学部講師）、久米篤憲（株式会社 PASC 代表）

コーディネーター：森和夫

○学びの見える化の課題と展望

日時：11月18日（土）9時半～11時半

講師：森和夫、西村美東士、齊藤ゆか

コーディネーター：齊藤ゆか

（文責 齊藤ゆか）

## 芸術（アート）と物語の交雑／発信力

### 1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2024年1月10日

会場：ZOOM 開催

講演者：仲田恭子氏（アートひかり）

演題：演劇をつくりつづける ―― 演出・身体・地域

#### 活動内容

本研究グループは、2020年秋に結成したもので、今年度は4年目となる。今年度中の活動としては、問題関心のすりあわせを進めつつ、それぞれに研究活動を展開した。

松本は、現代演劇を演出という観点から考えるために、上記1の講演会を催し、演出という作業の具体相について、理解を深めた。水川は、伏木啓によるパフォーマンス作品を、みなとみらいキャンパス「ナレッジコア」にて上演する企画を立ち上げ、それに関わり名古屋学芸大学において特別講義（2023年9月21日（木））を行った。藤澤は、アートと物語の関係、特に浮世絵における物語（歌舞伎などの

演劇も含む)の表現について焦点をあて、作品の調査を行った。研究成果として「はじめての「写楽」入門」(『歴史人 2023 年 12 月号増刊 特集「葛屋重三郎とは、何者なのか」ABC アーク, 2023)を發表し、歌舞伎役者の個性をどのように表現したのか、写楽の具体的な描写の特徴を明らかにした。

(文責 松本和也)

## おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表を行い、互いの研究内容についての意見交換を継続的に行った。主な成果は以下のとおりである。

1. 本共同研究グループのメンバーの大塚奈奈絵氏が、ちりめん本「日本昔噺シリーズ」の再話者の一人であるジェイムス夫人が果たした役割について分析した論考2本が、今年度発行の『人文学研究所報』vol. 69とvol. 70にそれぞれ掲載された。
2. オーストラリアのファンタジー作家 Isobelle Carmody 氏を招いて、創作とおとぎ話の関係についての講演会を下記のとおり開催した。

演題：Leaving the Path and Other Dangers

日時：2023 年 11 月 22 日 (水) 12:30~14:00

場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 18F プレゼンテーションフィールド

司会：村井まや子

主催：神奈川大学人文学会、おとぎ話文化研究所 (所長：村井)

3. 本共同研究グループのメンバー2名(鈴木宏枝氏と菅沼勝彦氏)と代表の村井が、おとぎ話や児童文学の中で動物とジェンダーが交差する様相を分析した単著の論考が、2024 年 2 月に刊行予定の神奈川大学人文学研究叢書(編集は共同研究グループ「〈身体〉とジェンダー」)に収録される。
4. おとぎ話にみる複数種の間関係を再考する村井の研究課題「Multispecies Fairy-Tale Library Project」の一環で、ロンドン芸術大学コミュニケーションカレッジの研究者と連携して、図書とデザインの展示を2024 年 3 月に本学みなとみらいキャンパス 1F で開催する。

本共同研究グループは、代表の村井の退職に伴い、2023 年度末をもって活動を終える。これまで研究活動を支えてくださった人文学研究所のスタッフと常任委員のみなさまに、心より感謝申し上げます。

(文責 村井まや子)

## 神奈川の地域と文化

本研究は、横浜をはじめとする神奈川県のあるさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域(観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など)の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していくことを目指している。最終的には、本研究の成果を『大学の神奈川ガイド』と題した叢書として出版したうえで、講義・ゼミをはじめとする本学における様々な教育機会に活かし、人文学に根差した神奈川へのまなざしを神大生のアイデンティティーのなかに根付かせることを目指すものである。

昨年度は3度の研究会をおこない、民俗学・地理学・歴史学・観光学といった学内の様々なディシプリンの研究者たちに、さらに学外から各トピックの第一人者の研究者も客員所員として加わることで、活発な議論が展開された。

この成果をふまえ、本年度は『大学の神奈川ガイド』の刊行を目指してメンバー各自の執筆の段階に入った。メンバー諸氏には8月までに原稿を提出してもらい、編者(共同研究会の代表者である平山

昇)が出版社とともに検討したうえで、9月に諸氏に修正稿の提出を依頼した。幸いにもほとんどのメンバーから順調に提出がなされ、11月には初校ゲラが出来るところまでこぎつけた。

今後、編者と出版社とやりとりをしながら全体の構成を整え、2024年度夏頃までの刊行を目指していく。

(文責 平山昇)

## 観光と美術

### 1. 研究会の開催

#### 第3回研究会

開催日：2023年6月30日(金)

会場：ZOOM

参加者：島川崇，角山朋子，クインタナ・シェラー，増子美穂，岡本岳大

検討内容：フランスの人気ツアーガイドの中村潤爾氏とZOOMでつないで、フランスのガイド事情を学んだ。フランスにおいては、遺産の活用にガイドは不可欠であると考えられており、ガイドは学芸員と並ぶリスペクトをもって迎え入れられている。観光客が説明なしで直接的に見るだけでは分からない文化遺産の持つ価値を最大限に伝えるのがガイドの仕事であるから、ガイドに求められる能力もかなり高度である。ガイドは、文化遺産に対する知識だけにとどまらず、いかに楽しく伝えることができるかということも重視されているところが日本と大きく異なる点である。フランスでは大学の人文学系の学部にガイド資格の取得コースが設けられている。これが、観光ガイドが職業として確立する基礎となっているということが理解できた。

### 2. シンポジウムの開催(予定)

横浜美術館からみえる「観光」

開催日：2024年1月24日(水) 16:00~17:30

場所：1階米田吉盛記念ホール

講演者：襟川文恵氏

横浜美術館渉外担当リーダー

内容：横浜美術館が3年の休館を経て2024年3月15日からリニューアルオープンし、オープンと同時に3年に一度開催されるアートの国際展覧会「横浜トリエンナーレ」も開催される。ポストコロナの新しい横浜美術館は、アートを通して新しいものに出会う、お互いを受け入れることで誰もが自分らしくいられる、そのことによってみんなが生きる力を得ることができる、そのような美術館を目指していく中で、「観光」はどう見えているのか、みなとみらい地区の各企業とアートを通じて連携を深めている襟川文恵氏に講演をいただき、トークセッションも実施する。

### 3. 活動内容

ここまで3回の研究会および2回のシンポジウムを実施して、観光と美術の関連は、今までの経営学的視点や都市計画(建築学)的視点では見出すことができない新たな視点を見出すことができるということにあることに気づいた。中でも、今まで害悪とみなされていた地域のものが美術という視点によってそれが地域の宝となるという事例があるということが分かったので、来年度は、美術の視点によって地元の害悪が観光素材となった事例をさらに整理していきたいと考えている。

(文責 島川崇)

## 言語景観と多文化共生

本研究は、2020～2022年度の学内共同研究奨励助成金を獲得したため、2023年度は『多文化共生社会の情報発信を再考する（仮題）』という題目での図書刊行に向けた打ち合わせを開始した。

2023年5月29日・9月21日・10月8日・12月28日にオンラインでのミーティングを実施し、2024年度に予定する刊行図書の内容や章立てについて議論を重ねている。

（文責 鈴木慶夏）

## 国際日本研究

### 1. 講演会の開催

#### 第1回講演

開催日：2023年5月24日（水）

会場：MMC 4020 と Zoom

発表者（所属）：マッコリー・トーマス（シェフィールド大学 人文学部）

演題：Composition under Constraint: Gender-Based Approaches to Topic in *Eikyū hyakushū*

#### 第2回講演

開催日：2023年7月19日（水）

会場：MMC 4020 と Zoom

発表者（所属）：ウェーリー・ベン（カルガリー大学 人文学部）

演題：[Book talk] *Toward a Gameic World: New Rules of Engagement from Japanese Video Games*

#### 第3回講演

開催日：2023年10月18日（水）

会場：MMC 5030

発表者（所属）：ロ・ワイ・イー（外国語学部 英語英文学科）

演題：[Book talk rehearsal] *Empire of Culture*

#### 第4回講演

開催日：2023年11月22日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：グルーノ・トリストラン（名古屋大学 人文学研究科）

演題：Tokyo Station and the Building of Japanese Imperial Urban Space

#### 第5回講演

開催日：2023年12月20日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：ルパート・ブライアン（国際日本学部 国際文化交流学科）

演題：When “Turning the Dharma Wheel” (転法輪) Means “Subjugation” (調伏): The Curse Rite Tenpōrin hō (転法輪法) and the Construction of the Sovereign in the Kami-Buddha Multiverse of Medieval “Japan” (日本)

#### 第6回講演

開催日：2021年1月17日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）

演 題：The Big Lives of Little People: Imaginary Places and the Edo World View

2. シンポジウムの開催

なし

3. 活動内容

2023年度は国際日本研究グループの2年目であった。予定通り、本研究グループの研究者や外部の研究者による講演会を計6回開催した。ウェーリー氏とグルーノ氏の講演は一般に公開され、H-netや他の公開研究リストで告知されたために対面・オンラインによる外部の聴講者も参加した。毎回実り多い意見交換ができた。

(文責 ウェルカー・ジェームズ)

## 購入文献解題

『中華大蔵経（漢文部分）続編：漢傳注疏部』（全 12 冊）

編集：中華大蔵経編集委員会

出版社：中華書局

出版年：2020 年 7 月

解題：

本書シリーズは 1997 年に刊行された『中華大蔵経（漢文部分）』に続くものである。本シリーズの所収文献の内容には、『中華大蔵経（漢文部分）』未収の重要仏教典籍（各種版本の大蔵経、敦煌文献、房山石経など）が含まれる。その中には古代の中国、チベット、朝鮮半島、日本、インド、東南アジアなどの地域の資料が収められている。このシリーズは中国における仏教の伝播史研究だけでなく、アジア全域における宗教、思想、哲学、歴史、言語などの交流の歴史を研究するための重要な基礎文献となる。歴史言語学の視点から見ると、『大蔵経』シリーズ資料の「漢傳注疏部」は、書記言語としての中国語が古代の「文言体」から現代の「白話体」へと変化する過程およびその間に受けたサンスクリット語からの影響などを観察し、音韻、語彙、文字、文法、意味などの各言語要素の変化を追跡する上で重要な証拠発見につながる貴重な文献である。

（文責 彭国躍）

## 所員自著紹介

1. 齊藤ゆか, 森和夫, 西村美東士 (編著) 『学びの見える化の理論と実際: 教育イノベーションにむけて』 勁草書房, 2023年3月, 296頁

本書は、職場や学校で獲得すべき能力を明瞭化する手法であるクドバス (CUDBAS) を活用し、「学びの見える化」の課題と展望を論じている。CUDBAS (クドバス) とは、*A Method of Curriculum Development Based on Vocational Ability Structure* (職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法) の略称である。

これまで教育における課題は、何が問題か、何が課題か、未来への見通しが見えていない現実があった。また、方法論の未確立や検証の曖昧さがあった。

そこで学びの見える化モデルは、事実に基づく目標設定から実行結果の検証までを扱う。このモデルは教育を含むどの分野でも適用が可能である。しかし、本書は「学びの見える化」の理論編と、実際にそれを推進する上での指針となる実践編の全6章で構成した。特徴は次の点にある。第1は「教育」「人材育成」の上位概念の「学び」を据え、「働く」と同レベルで「学び」を対象とした。第2は企業内教育、生涯学習、職業教育、専門的職業人養成 (行政・非営利組織)、学校教育を対象に「学び」の本質を扱った。第3は「学びの見える化」の原理を示し、その実践事例を豊富に示した。第4に「学びの見える化」で新たに見いだせる諸事象を明らかにした。本書の意義・意味と共に、示された方法論・手続きに従って研究及び実践を深めることで、職場の人の問題・課題を明らかにし、解決へ導いた。

2. *A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception* Tatsuya Yoshizawa (Ed.), T. Yoshizawa, N. E. Scott-Samuel, H. Kojima, G. Maehara, U. Leonards, K. Ono, R. Matsunaga, H. Shoda, N. Asakura Asakura Publishing, 2023/2/1, 113 ページ

*A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception* is released as a proceeding of the international symposiums on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility held at Kanagawa University from 2019 to 2022 and is contributed by nine experts. This book introduces the outcomes of recent scientific research on the sense of plausibility, which is experienced in everyday life. The sense of plausibility is obtained in various situations and aspects and is empirically a familiar sensation. However, it can be challenging to describe itself linguistically. One might acknowledge that this sensation is not a simple recall of stored memories stored based on one's own experience. Therefore, it is a fascinating research topic to clarify and describe such a vague psychological phenomenon and its mechanism.

和訳

『*A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception*』は、2019年から2022年にかけて神奈川大学で開催された、もっともらしさの性質のための知覚と認知システムに関する国際シンポジウムの議事録として公開されており、9人の専門家が執筆しています。本書は、日常生活で経験される「もっともらしさ」についての最近の科学研究の成果を紹介するものです。もっともらしさの感覚はさまざまな状況

や側面で得られ、経験的に馴染みのある感覚です。ただし、それを言語的に説明するのは難しい場合があります。この感覚が、自分自身の経験に基づいて保存された記憶の単純な呼び出しではないことを認める人もいるかもしれません。したがって、このような曖昧な心理現象とそのメカニズムを解明し記述することは興味深い研究課題です。

## TOC

### Part I Plausibility in Visual Perception 1

1. Visual Plausibility of Objects and Mechanisms of a Sense of Plausibility
2. Camouflage, and Its Relationship with Plausibility
3. Is Chromatic Motion System Lateralized?—On the Issue of Lateralization of Visual Function—
4. An Implausible Impression of Stereogram Could Be due to Perceptual Enhancement of Luminance Modulation
5. Urban Design and Visual Plausibility—When Vision Leads the Body Astray—

### Part II Plausibility in Music Perception and Speech Perception

6. Effects of Perceptual Grouping in the Brain Processing of Sounds
7. The Processing of Tonal Organization in Music
8. The Audience Effect on Music Performances
9. A Kalman Filter Model for Adaptation to Delayed Auditory Feedback in Adults Who Stutter

### 3. 大津由紀雄・南風原朝和 編『高校入試に英語スピーキングテスト？』

久保野雅史「第4章 なぜ東京都は ESAT-J の実施にこだわるのか」共同執筆  
岩波書店, 2023 年 11 月, 全 84 頁中の p. 59~p. 72

2022 年 11 月に実施され都立高校の入学者選抜の資料として利用された ESAT-J (中学校英語スピーキングテスト (English Speaking Achievement Test for Junior High School Students)) には, さまざまな問題点が指摘されている。本書は, 部分的改善では到底解決できないこのテストとその入試への利用が孕む深刻な欠陥を検証し, 全国で同種のテストが導入される危うさを訴えるものである。本書の構成は以下の通りである。

はじめに……大津由紀雄・南風原朝和

第1章 ESAT-J とは何か?……沖浜真治

第2章 入学者選抜試験としての ESAT-J の公平性と合理性——不受験者に対する措置に焦点をあてて……南風原朝和

第3章 入試への英語スピーキングテスト導入を検討する際の基本事項——急ぎ過ぎた都教委が見落としたもの……羽藤由美

第4章 なぜ東京都は ESAT-J の実施にこだわるのか……大津由紀雄・久保野雅史

第4章では, 国の英語教育政策に沿った形で, 他の都道府県に先んじて英語教育の「実用化」のための施策を東京都が次々と打ち出し, その具体策の一つとして ESAT-J が位置づけられることを, 英語教育戦略会議という有識者会議の議事録等を基に明らかにした。

4. 松本和也『戦時下の〈文化〉を考える ― 昭和一〇年代〈文化〉の言説分析』  
思文閣出版, 2023年8月, 260ページ

これまで、論者は昭和10年代の文学言説を歴史的に検討する作業を継続してきた。その際、太宰治（受容）を1つの軸としつつ、『昭和十年前後の太宰治 〈青年〉・メディア・テキスト』（ひつじ書房, 2009）を皮切りに、『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会, 2015）を中仕切り、そして『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』（ひつじ書房, 2021）を集大成として、作家・作品に捉らわれることなく文学言説の地平を分析的に見渡してきた。

そうしたなか、浮かび上がってきた時代のキー・マンは、文学座の創設者にして、大政翼賛会文化部長を務めることになる、劇作家の岸田国土であった。そして、岸田国土を軸に、改めて昭和10年代の（文学言説ならぬ）文化言説を検証することが焦眉の課題となった。

昭和戦前期、〈文化〉はどのように語られ、いかなる意味を担っていたのか――。日中戦争開戦前、フランスを中心とする思想にアクセスできる文学者や哲学者にとって、〈文化〉は迫り来るファシズムに抵抗するための根拠だった。それからわずか数年、〈文化〉は多くの国民が関わり、太平洋戦争を支える旗印となっていた。本書では、この「文化の擁護」から「文化の建設」へと至る歴史的転回を、当時の膨大な言説の分析から検証した。

## ニューズレター（第3号 2023年9月1日発行）

### 講演会報告（1）

櫻井良樹氏（麗澤大学）「宇都宮太郎関係文書の中国人陸軍留学生関係資料について」  
共同研究グループ「日中関係史」

開催日：2023年2月4日（土）

会場：神奈川大学 MM キャンパス 200032 室  
（オンライン配信）

櫻井良樹氏の報告は、国会図書館憲政資料室で公開（2022年6月）が始まった宇都宮太郎関係文書の概要について紹介するものであった。特に、(1) 宇都宮の海外視察、(2) 清国陸軍留学生招聘の経緯、(3) 留学生受け入れの中止と応募将校派遣縮小問題、(4) 『支那陸軍学生教育史』編纂と振武義会・振武資金と宇都宮日記・文書・書簡との関連について詳細な説明がなされた。その

他に、川上操六（成城学校長）〔学生監督上の諸注意〕明治31年、福建陸軍武備学堂景況、明治37年1月、〔朝鮮人留学生の学費及人名簿控〕明治31年12月、「清韓応聘武（文）官一覧表 明治四十二年十月上旬調 参謀本部 第二部」、〔同文学院在学中ノ支那学生ヲ陸軍士官学校ニ入学セシムル件ニ付監督周斌ニ注意事項〕などの資料が保管されているという。



## 講演会報告 (2)

西本雅実氏 (中国新聞元記者) 「広島で被爆した中国人留学生について」

共同研究グループ「日中関係史」



開催日：2023年4月22日(土)

会場：神奈川大学 MM キャンパス 200032 室  
(オンライン配信)

西本雅実氏の報告は、日中の歴史研究において埋もれた広島で被爆した中国人留学生の実態について紹介する内容であった。西本氏の指摘によれば、『広島原爆戦災誌』(広島市1971年発行)第1巻に広島で被爆した中国人は、「1945年の時点で14人が数えられる」という記載があり、『生死の火』(広島大1975年発行)には、被爆した中国人「留学生は三七名を超えていた」とし、旧満州国出身で原爆死3人の名前を記載していること

にふれ、現時点で合計17名の中国人留学生が確認できることが報告された。西本氏の調査などの影響もあり、広島大は2023年5月末、大学の「原爆死没者名簿」に未記載の中国人留学生の名前を追加することを決めるとともに、被爆して現在までに死没が分かった留学生を広島市の「死没者名簿」に掲載するよう市に申請した、という。

## 講演会報告 (3)

トーマス・マッコリー氏 「Composition under constraint:  
Gender-based approaches to Topic in Eikyūhyakushū」

共同研究グループ 「国際日本研究グループ」

開催日：2023年5月24日（水）

会場：みなとみらいキャンパス 4020号室  
（オンライン配信）

今回の講演ではデジタル・ヒューマニティーズ（デジタル人文学）のアプローチと和歌を結びつけました。トーマス・マッコリー氏が永久百首（永久四年百首，作成年月日1117年1月24日）を紹介してから，その歌とジェンダーに焦点を当てました。主に，女性歌人が詠んだ歌と男性歌人が詠んだ歌の違いを把握するため，テキスト分析ソフトを使って，何百もの歌をテーマに沿って分析し，違いがあるかどうかを調べました。残念ながら，この分析では有意な差は見られませんでした。マッコリー氏は，これは和歌が非常に定型的な方法で書かれ，男女を問わずすべての歌人が規範に従う傾向があるからだと考えています。



## 調査研究報告 (1)

山口県周防大島の起業家教育の実践事例

国際日本学部准教授 崔瑛

2023年2月11日から12日までの2日間，山口県南東部に位置する周防大島町の株式会社ジブンノオトを訪問した。周防大島は，1963年にハワイ州カウアイ島と姉妹縁組を締結しており，多くのハワイ移民を輩出したことで，「瀬戸内のハワイ」といわれる。また，周防大島には，「瀬戸内ジャムズガーデン」のような島ならではの魅力を活かした個性的な企業が複数存在する。

今回のフィールドワークでは，周防大島出身者であり，Uターンしてから島内でフリーペーパーの発行や起業家教育プログラムの企画・実践に取り組んできた起業家大野圭司氏（株式会社ジブンノオト代表）をインタビューした。島で起業家教育をはじめたきっかけや今まで取り組んできた具体的な実践事例，会社の運営状況について把握した。大野氏は，今まで島内の中学校や県内の高等学校にて，総合的な学習の時間を使って，オリジナルの起業教育を長年実践してきており，教育を受けた生徒らの反応等を細かく把握し，資料として集めていた。大野氏とのインタビューでは，起業家教育後の効果検証の方法論について，議論することができた。

また，大野氏と協力し，島内で様々な教育コースを作り，実践してきた3人の教育関係者らとも周防

大島での起業留学の現状と今後の方向性について議論した。今回のフィールドワークでは、周防大島における起業家教育の現場、教育のための宿泊施設を視察し、島の教育実践者らと、お互いの考えを共有する時間を過ごすことができた。



訪問した教育研修施設

## 調査研究報告（2）

静岡県舞台芸術センター， 静岡県立美術館調査研究報告

国際日本学部教授 松本和也

いわゆる日本の「近代化」は、年表で示されるような出来事によって一朝一夕に変化するばかりでなく、こと、文化領域においてはそれぞれのジャンルにおいて、個別具体的な西洋の文物の移入や、西洋で学んできた帰朝者を軸に、徐々に「近代化」が進んできた。

今回の調査においては、演劇と絵画の領域において「近代化」が一段階進んだ明治末年の動向を検討するために、近代劇および日本画に関わる舞台作品・展覧会を調査した。

3月11日には、静岡芸術劇場において、公益財団法人静岡県舞台芸術センターによる演劇作品『人形の家』（演出：宮城聡，作：ヘンリック・イブセン，訳：毛利三彌（論創社版））を観劇した。イブセン劇は、近代日本演劇史上、たいへん重要な作品であるばかりでなく、文学（者）をはじめ、他ジャンルにも大きな影響を与えたものである。当初は、いわゆる「演劇」としてではなく、まずは「読む戯曲」として上演され、それを観客が「近代劇」として受けとめていた。日本での初演（1911年）からすでに100年以上がたって、当初『人形の家』がもっていた革新性は、わかりにくくなった面もあるものの、今回の上演では「女性の自立」というテーマに限らず、人間が「自我」をもって生きることの困難と意義とが端正な上演によって示され、むしろ現代にも通じる『人形の家』の普遍性も表現されていたように映じた。

3月12日には、静岡県立美術館において、企画展「近代の誘惑 日本画」を閲覧した。洋画移入後の「日本画」について、明治から昭和の日本画が展示されており、特に明治末年～大正期の作品を、同時期の日本の洋画を想定・比較しながら、西洋の影響をはかりながら検討した。



Fig1：静岡芸術劇場



Fig2：静岡県立美術館

## 調査研究報告 (3)

### ハワイでの言語景観に関する調査

国際日本学部教授 菊地恵太

2023年3月31日にハワイ州ホノルル市において調査を行った。空路にて同日午前中にダニエル K イノウエ空港に到着し、まずは同市最大のアラモアナショッピングセンターまで市バスで移動し、多言語による言語景観に関する調査を進めた。空港やバス停などの公共交通機関では多言語表記が多いのだが、地元の人向けの商業施設の中ではどうであろうかという点に今回は着目し、多くの観光客が多いアラモアナショッピングセンターから徒歩でもほど近いドン・キホーテ カヘカ店へと足を延ばしてみた。

なお、この店舗は2006年までダイエーだったが、経営不振でドン・キホーテとなった場所であり、筆者も2019年から2020年までの在外研究期間中、よく訪れていた。まず、写真1は2020年初頭に撮った入り口付近の写真である。この写真から見てわかるように2020年には入り口付近のハワイ土産のコーナーがあるが、Hawaiian-Souvenir と〇で囲ってある箇所に注目しても日本語表記は見当たらない。右上に Buyer's specials とお店が勧めるお買い得商品のコーナーもあるが、すべて英語表記である。



写真1

その Buyer's specials のサインがあった全く同じ場所に何が置いてあるかを今回は着目し、まず調査を始めた。写真2と3をご覧ください。その場所にはなぜか「千万両」と漢字で書かれた小判と思われるものを抱えた猫のTシャツと「柴犬」と漢字で書かれた犬のTシャツが置いてあった。言うまでもなくこれらは日本語のわかる日系人向けの商品であり、日本人観光客向けではない。



写真2



写真3

写真4をご覧ください。こちらは、前回の Hawaiian-Souvenir の表記がどのようになっているかを示したものが、ハワイ土産と日本語併記になっている。またハワイ土産の定番のマカデミアナッツチョコレートについてもハワイアンホーストチョコレートとカタカナで併記されていることに気が付いた。写真1と比べると右上の白い壁の部分であるが、その部分を暖色系の壁紙を施し、ドン・キホーテのマスコットであるドンペンを使い、にぎやかな雰囲気を出していた。



写真4

一方、写真5と6を見ていただくとわかるようにキリン一番搾りとして国内では売られている現地の人向けのビールに関してはすべて英語表記であった。日本国内では、ビールの味や泡に関するの宣伝文句がよく聞かれる気がするが、こちらのPOP広告ではChoose fortuneというサインと共に春だからであろうか、桜やピンク系の提灯で商品を目立たせていた。こちらは言うまでもなく日本人観光客向けではなく、現地の人向けであることがこうした表記からもよくわかる。ちなみに現地の日系人の友人に聞くとICHIBANはNo. 1を表すことはよく知られており、運のよいといった宣伝文句として使われたのだろう。



写真5



写真6

日本語、英語が購買層によって巧みに使われている同店は非常に興味深く、今後日本人観光客が戻ってきた後にどれほど日本語と英語表記の使用が変わるのかをまた調査したい。

## 調査研究報告（4）

### コクヨ梅田ショールーム調査研究報告

人間科学部教授 衣笠竜太

2023年7月12日に大阪商工会議所主催の「未来のウェルネス実装ネットワーク」に参加した。大阪商工会議所によれば、本ネットワークは、130社・300人以上が参加していた模様である。本ネットワークは2025年大阪・関西万博「大阪ヘルスケアパビリオン」への展示出展に向けた一連の取り組みの一つとして位置づけられ、ウェルネス関連プロダクトの実装シーンを探す企業と、空間の付加価値を高めるためにウェルネスの要素を取り込もうとする企業、さらにウェルネス関連プロダクトを取り入れてビジネスの拡張を目指す企業の3者が出会うイベントであった。私は現在、筋電センサーの開発を進めているが、親和性のありそうな脳波計を開発している企業、心の可視化に挑む企業、加速度センサーを用いて歩行分析を行っている企業の担当者と、想定している顧客とペイン、市場性、ビジネスモデル、マネタイズ、差別化、マーケティング戦略などについてディスカッションすることができた。

# ニューズレター (第4号 2024年3月1日発行)

## 2023年度前期人文学研究所シンポジウム報告

### 「音楽分野の日中関係史を考える」開催報告

### 共同研究グループ「日中関係史」

開催日：2023年9月16日(土)

会場：みなとみらいキャンパス 11階(オンラインあり)

報告：

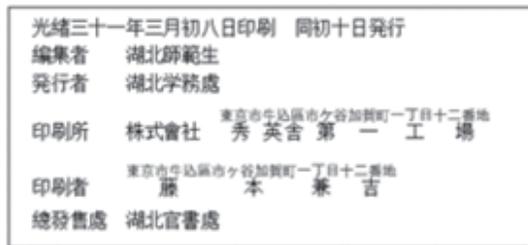
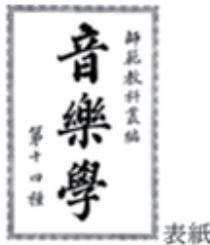
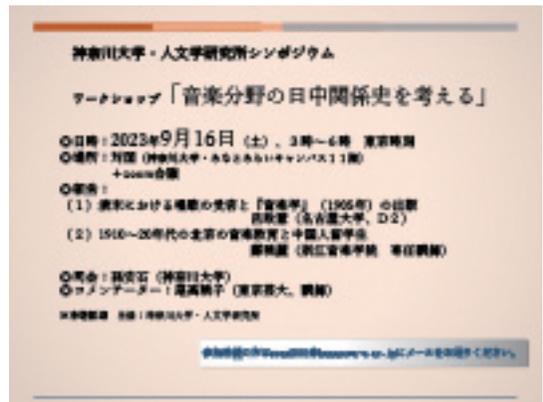
1. 清末における唱歌の受容と『音楽学』(1905年)の出版 呂政慧(名古屋大学, D2年)
2. 「1910~20年代の北京の音楽教育と中国人留学生」鄭曉麗(浙江音楽学院, 専任講師)

司会：孫安石(神奈川大学)

コメンテーター：尾高暁子(東京芸大, 講師)

呂氏の報告は、清朝末期の中国湖北省師範留学生が編纂した音楽教科書『音楽学』(1905年)を

取り上げ、近代における歌の越境をめぐる受容と変容の問題を論じるもので、(1)『音楽学』の出版情報から見る日本との関係、(2)『音楽学』の下編の唱歌から見た近代唱歌の受容関係、(3)『音楽学』の唱歌と参照した日本の唱歌の比較から見た異同について報告する内容であった。



(呂政慧氏の報告資料より)

鄭氏の報告は、台湾出身の柯政和が1911年からの日本留学をへて、1920年代に入り北京の音楽界で教員、雑誌の発行、演奏会の設定など様々な活動を行った内容を、(1)日本留学の経験、(2)1920年代年代の北京音楽界、(3)北京師範大学での音楽教育活動、(4)西楽社・北京愛美楽社の創立と演奏会の開催、(5)『新楽潮』の創刊と『音楽雑誌』への寄稿、(6)中華楽社の設立と音楽出版、(7)中国在住の日本人・日本組織との関わりに分けて報告する内容であった。



図3：『新楽潮』創刊号表紙



図4：『新楽潮』1928年第2巻第2期表紙

(鄭曉麗氏の報告資料より)

コメンテーターの尾高氏を交えた質疑応答の時間では、中国での「ぴょんこ節」唱歌の受容について、歌詞を完全に入れ替えた唱歌が意味するものについて（以上、呂氏の報告）、台湾人の柯政和が北京で活躍したことの意味や外務省外交史料館所蔵の柯政和資料（以上、鄭氏の報告）について活発な意見交換があった。

オンラインを併用した本研究会は対面参加13名+zoom参加22名の合計35名の参加があり、本学の教員、学生はもちろん、上海、北京、広島などの幅広い分野の専門家の参加を得ることができた。ご支援いただいた人文学研究所のみなさまに深く感謝申し上げます。

文責 孫安石（日中関係史共同研究代表）



会場の写真1



会場の写真2

## 講演会報告 (1)

木川剛志氏（ドキュメンタリー監督・観光映像専門家・日本国際観光映像祭代表・和歌山大学観光学部教授）「観光映像からドキュメンタリーまで — Yokosuka 1953 横浜上映記念講演 —」

国際日本学部准教授 崔瑛

開催日：2023年11月16日（木）

会場：みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール

木川剛志監督のドキュメンタリー作品「Yokosuka 1953」の横浜での上映にあわせ、作品の背景となる横須賀・横浜の戦後の混乱期の状況や関連する人物の人生について説明がなされた。この説明は、観客の作品への理解を深め、好奇心を刺激する内容だった。また、木川氏が専門とする観光映像に関するセッションもあり、彼が代表を務める日本国際観光映像祭についての紹介と共に、観光映像の評価基準についての解説が行われた。実際の作品例を紹介し、参加者からは好意的なコメントが寄せられた。

質疑応答のセッションでは、「Yokosuka1953」の主人公と同じ年代の横須賀市民から映画に関する感想が述べられ、映画や講演会への市民の反応を把握する貴重な機会となった。さらに、読売新聞社やタウンニュースの記者も出席し、記者らからの質疑も受けることができた。11月18日土曜日の読売新聞朝刊の地域欄記事として本学での講演会が紹介された。また、当日出席したタウンニュース記者によってYokosuka 1953の上映に関する記事が紹介された。映画への深い理解を促すだけでなく、地域コミュニティとのつながりを強化する機会となった。

ドキュメンタリー映画 Yokosuka 1953～GI ベビー、ルーツ探る旅～

【タウンニュース 横須賀版】



会場の様子

## 講演会報告 (2)

トリストラン・グルーノ氏 (名古屋大学人文学研究科准教授) 「Tokyo Station and the Building of Japanese Imperial Urban Space」

国際日本学部准教授 ティネッコ・マルコ



開催日：2023年11月22日(水)

会場：みなとみらいキャンパス 5030室 (オンラインあり)

Tokyo Station opened to great fanfare in 1914 with a ceremony that doubled as a celebration of the expanding empire. Tokyo mayor Sakatani Yoshirō applauded the station building rising before them, proclaiming that it “tastefully prostrates itself before the solemn nobility of the nearby imperial palace” with a grandeur that made it the “pride of the imperial capital (Teito).” Tokyo Station, then, capped a space of both emperor and empire at the heart of the city, mediating Japan’s aspirations as a first-class world power as much as Tokyo’s status as the metropolis of an overseas empire.

Like Tokyo Station itself, Tokyo’s reputation as the “Imperial Capital” took several decades to emerge. This talk revisited the contested planning of Tokyo Station to retrace how popular conceptions of both the station and the city changed over the Meiji Period and clarified how the evolving design of Tokyo Station manifested not only an emerging consensus about Tokyo’s status as the imperial capital, but also the incipient Japanese nation and empire in the Meiji Period.

## 講演会報告 (3)

見城悌治氏 (千葉大学 国際教養学部教授)  
「川島真氏, 孫安石氏に対するコメントと報告」

外国語学部教授 孫安石

開催日: 2023年12月9日(土)

会場: みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール

2023年12月9日(土)に開催された「関東大震災の研究についての報告&討論会—非文字資料と歴史」は、非文字資料研究センターの研究班と人文学研究所の「日中関係史研究班」が共同で開催した講演会で、第2部では、報告1「関東大震災における中国人虐殺事件—国際労働力移動の観点から見る」川島真(東京大学)、報告2「関東大震災と中国人留学生」孫安石(神奈川大学)、報告3「川島真氏, 孫安石氏に対するコメントと報告」見城悌治(千葉大学)が行われた。とくに、見城報告では、(1)自然災害をめぐる日本と中国の二国間(または、国際間)の間では、軋轢と拮抗だけではなく、「共助」という場面があったのではないかと、(2)同じ脈絡で、日華学会の中国人留学生支援なども1920、30年代という時代的な制約のなかで、支援と「管理」という両側面があったことが評価されても良いのではないかと、という論点が提示され、活発な討論となった。



## 調査研究報告 (1)

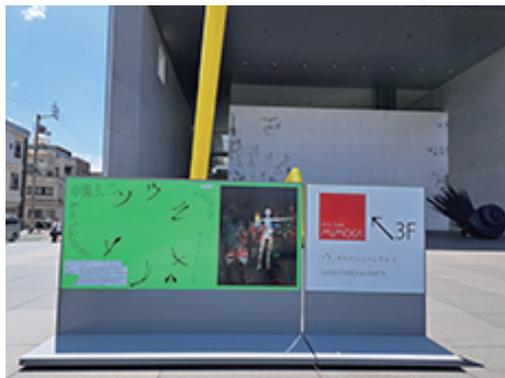
地方における現代美術の調査

(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館, 豊島美術館, 道後温泉地区)

国際日本学部教授 松本和也

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では企画展「中園孔二 ソウルメイト」展を閲覧・調査した。瀬戸内海沖で消息不明となった夭折の画家・中園ゆかりの地で、複数のレイヤーから構成された絵画の多彩な表層にくわえ、それを手がかりとした向こう側の「何か」とこちら側の画家のイメージを感じ取ることができた。豊島美術館では、土地の歴史、風土と一体化した美術館建築までのプロセス、立地を如実に体感しながら、実際に体験しなければわからないと言われる、一作品だけのための美術館の内実にふれることができた。建築家・西沢立衛による天井に2つの大きな穴をうがった水滴のような流線型の空間内に、アーティスト・内藤礼による《母型》が展示されている。見上げれば、天井からは借景よろしく空と山が見え、足下では、わきでる水が微細な動きを積み重ねて「泉」をなしていく。独特な時間の流れ

が、島の自然を取り込みながら成立していた。道後温泉地区では「道後アート2023」として、街の雰囲気にあわせた多彩なインスタレーションが展開されていた。



猪熊弦一郎現代美術館



豊島美術館



道後アート2023

## 調査研究報告（2）

### 大阪と京都の出張報告

国際日本学部教授 尹亭仁

12月1日（金）～3日（日）の2泊3日、大阪と京都に出張した。韓国語の授業で取り組んでいる「参加誘導型視覚教材」における韓国語の言語景観を充実させ、学生たちに「多言語表示サービス施設」の情報をより具体的に提供する必要があったからである。

初日の12月1日は新大阪駅および大阪駅周辺で多言語表示の調査を行なった。新幹線が走る新大阪駅より在来線の大阪駅周辺に韓国語表示が多く、観光に来ている韓国人も多かった。2023年現在、日本を訪れる訪日外客は韓国人が最も多いことを実感した。

JRで大阪駅から鶴橋駅まで移動したが、電車の中の電光掲示板に多言語表示が流れていた。10年ぶ

りに訪れた鶴橋には比べ物にならないほど韓国料理屋が増えていたが、韓国料理名が韓国語で提示される店よりカタカナで提示される店が多かった(図1)。ある店のオーナーに聞いたところ、コロナが明けてから、訪れるお客さんが増え、特に週末は混むほどであると答えた。平日であるにも関わらず、中年の女性客が多かった。

大阪歴史博物館の場合、今まで見てきた多くの「多言語表示サービス施設」と違って韓国語が中国語より先に表示されていた(図2・図3)。ところどころ、日・英・中・韓の4言語表示も見られたが、多くの表示に韓国語が先である特徴が見られ、筆者が主張している「近隣性」を確かめることができた。何より、全体的に韓国語表示が充実していたので、学生たちの野外学習地としては「優良多言語表示サービス施設」と言える。大阪城にも多くの韓国語サービスが見られた。



図1 大阪鶴橋



図2・図3 大阪歴史博物館の韓国語



図4 大阪城の韓国語

2日目には京都駅周辺の調査をしてから、京都で最も混むと言われる清水寺を訪れ、京都のオーバーツーリズムの現状を目にした(図5)。韓国語と中国語は案内と禁止表示に一部見られた。



図5 清水寺とオーバーツーリズム

京都国立博物館では多くの作品の解説に多言語サービスが提供されていたが、撮影禁止であった。韓国語の翻訳のレベルは高かったが、直訳による誤訳も目に付いた(図6・図7・図8)。



図6・7・8 京都国立博物館の多言語表示と韓国語

3日目は本学との比較のため、大阪大学豊中キャンパスを訪れた。英語表示は見られたが、韓国語と中国語の表示はなかったため、その理由を確かめる必要があると考えた(図9)。その後訪れた阪急デパートでは横浜のデパートでは見たことのない充実した多言語表示を見ることができた(図10・図11)。特にフロアガイドは韓国語の授業でも活用できるようなものであったため、資料として韓国語の教員同士で共有することにした。今回の大阪・京都の調査資料に基づいて首都圏の多言語サービスと比較を試みたい。



図9 大阪大学の2言語表示



図10・図11 阪急デパートの多言語表示と韓国語

# 神奈川大学 人文学研究所

The Institute for Humanities Research

Kanagawa University



### ◆人文学研究所の事業

人文学研究所は1963年、人文学研究領域相互の活発な研究活動を支援することを目的に神奈川大学の附属研究所として設立されました。

人文学研究所の主な活動は

- ① 人文学に関する研究及び調査
- ② 研究資料の収集及び整理
- ③ シンポジウムや講演会開催
- ④ 研究及び調査成果の発表のための刊行物の発行

などを中心としています。具体的には、人文学系の各種テーマによる共同研究グループの共同研究を大きな柱に様々なシンポジウム・講演会を開催し、また、『神奈川大学人文学研究叢書』を発行するなど多彩な活動を行っています。

### ◆人文学研究所の研究活動

人文学研究所の活動は、共同研究グループによる調査・研究活動と、国外研究機関との学術交流やシンポジウムの開催の二つに分けることができます。本研究所設立以来、活動を展開した共同研究グループは総数30グループ以上を数えます。

#### 【人文学研究所共同研究グループ一覧】

(2024.3)

No.	名 称	研究テーマ
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題
2	言語変異研究	中国語の語彙近代化問題
3	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象の変容と、その文化的・社会的メカニズムとの関わりについて、なかでもジェンダーという視点に注目しながら、地域や時代を横断し、多様なテキストをもとに考察する。
4	自然観の東西比較	風土を基礎にした神と自然についての歴史的、思想的な比較研究
5	日中韓対照言語研究	日中韓三言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究
6	各国近代文学の研究	1. 各国の近代文学の対象・方法・成果を比較・検討する 2. 各国の近代文学（研究）の社会的・歴史的配置を研究する 3. 「新しい文学研究」の方法論・実践を模索する
7	知覚認知システムの普遍性と多様性	人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする。
8	学びの見える化	『学びの見える化の理論と実際』を読み解く会
9	臨床心理学研究グループ	臨床心理学に関する包括的研究
10	芸術（アート）と物語の交雑／発信力	広義の芸術（アート）について、物語との交雑を視野に入れて、調査・研究を行う。
11	おとぎ話文化研究	おとぎ話とそのアダプテーションについて、特に「おとぎ話と生物多様性」の問題を中心に、文化、時代、メディアを横断する視点から研究する。
12	神奈川の地域と文化	横浜をはじめとする神奈川県のみならず、さまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域（観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など）の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していく。
13	観光と美術	美術とは、人間が社会を築き、それぞれの歴史、宗教、生活、自然環境から生み出された表現である。最近では地域の歴史遺産や伝統工芸は重要な観光資源としてにわかに注目されてきているが、その活動は一過性のものが多い。本研究グループは、美術（特にフェインアート）や工芸デザインの分野に特化し、観光における功罪を再認識し、その正負の効果を体系化する。美術・工芸デザインの真の美的価値を評価できるアート・リテラシーを向上させることで、観光での活用を持続可能なものにするのが目的である。
14	言語景観と多文化共生	観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する

15	国際日本研究	日本文化（社会や歴史、文学、美術、宗教、メディア等を含む）を国際的な視野で、学際的かつ総合的に研究すること
----	--------	---

※活動休止中「越境する比較文化」「NCH 新聞研究会」「ヒト身体の文化的起源」

◆人文学研究所・2023 年度・講演会

敬省略

No.	日時	講演者	テーマ	所属（職業）
1	4月22日（土）	西本雅実	広島で被爆した中国人留学生について	中国新聞元記者
2	5月24日（水）	トーマス・マッコリー	Composition under constraint: Gender-based approaches to Topic in <i>Eikyū hyakushu</i>	シェフィールド大学 准教授（日本学）
3	11月16日（木）	木川剛志	観光映像からドキュメンタリーまで——Yokosuka1953 横浜上映記念講演——	和歌山大学観光学部
4	11月22日（水）	トリスタン・グルーノ	Tokyo Station and the Building of Japanese Imperial Urbanism 東京駅と帝都東京の都市思想	名古屋大学人文学研究科准教授
5	12月9日（土）	見城 倬治	関東大震災研究について語る	千葉大学国際教養学部・教授
6	1月11日（木）	仲田 恭子	演劇をつくりつづける——演出・身体・地域	アートひかり（演劇ユニット）
7	2月29日（木）	吉本 裕子	観・魅せる／創出される民族のリアリティ ～アイヌ観光地における舞踊実演から	横浜市立大学 都市社会文化研究科 客員研究員

◆学術交流とシンポジウムの開催 2016 年～2023 年

- ◇国際シンポジウム「中国古典小説研究 30 年の回顧と展望」(Studies on Chinese Classic Novels Retrospect for 30 Years and Prospect for the Future) 2016 年, 主催
- ◇「ホスピタリティと人文学の役割——足元からの多文化共生——」  
【第一部】公開シンポジウム 【第二部】公開講演会 2016 年, 主催
- ◇国際シンポジウム「クィアな変容・変貌・変化（トランスフィギュレーション）：アジアにおけるボーイズラブ（BL）メディア」(Queer Transfigurations: International Symposium on Boys Love Media in Asia) 2017 年, 共催
- ◇国際シンポジウム「デザインミュージアムのヴィジョン」2022 年, 主催
- ◇国際シンポジウム「Literature Goes to School」2022 年, 主催
- ◇国際シンポジウム ワークショップ「音楽分野の日中関係史を考える」2023 年, 主催
- ◇国際シンポジウム「関東大震災研究についての報告&討論会——非文字資料と歴史」2023 年, 共催

◆人文学研究所の出版物

人文学研究所は研究所の諸活動によって得られた成果を社会に還元するために『人文学研究所報』を年に2回発行しています（2023 年度 第70・71号）。国外研究機関との学術交流の成果としては、浙江大学日本文化研究所との共編で『中日文化論集』（1991～1999, 中国語）を発行してきました。さらに、共同研究グループの研究成果をまとめた学術書シリーズ『神奈川大学人文学研究叢書』を刊行しています。

## 人文学研究所共同研究グループ一覧

2023年度

No.	名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. メンバー各自の関心に基づく研究会の開催</li> <li>2. 学外研究者の講演、研究交流</li> <li>3. 日中相互の留学生に関する調査研究</li> <li>4. 在日華僑に関する調査研究</li> <li>5. 中国と東アジアにおける旧日本租界・居留地に関する調査研究</li> </ol>	孫 安石	孫 安石・松本安生・村井寛志・柳澤和也 〔名誉〕大里浩秋・鈴木陽一 〔元教〕吉川良和 〔学外〕荒川 雪・内山 籬・川島 真・川尻文彦・菊池敏夫・周一川・中村みどり・潘 吉玲・劉 建雲	16	2024年度予定
2	言語変異研究	中国語の語彙近代化問題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生態言語学の視点による中国語の言語近代化に関する資料調査</li> <li>2. 近代中国語の外来語と和製漢語借用に関する資料調査</li> <li>3. 中国語の「国語」の成立に関する史料調査</li> <li>4. 日中ボライトネス問題に関するデータ収集</li> </ol>	彭 国躍	彭 国躍・加藤宏紀・夏 海燕 〔非〕楊 洲	4	2023年度は無
3	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象の変容と、その文化的・社会的メカニズムとの関わりについて、なかでもジェンダーという視点に注目しながら、地域や時代を横断し、多様なテキストをもとに考察する。	2020年に発行した叢書『男性性を可視化する』の反省をもとにしつつ、2020年度から「種」や「動物」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。2023年度は前半に研究発表を重ね、後半に叢書のための論考の執筆、出版を目指す。	熊谷謙介	熊谷謙介・村井まや子・クリスチャン ラットクリフ・鈴木宏枝・秋山珠子・笠間千浪・角山朋子 〔名誉〕山口ヨシ子 〔非〕岡部杏子・小松原由理 〔学外〕古屋耕平・菅沼勝彦・江崎聡子・中村みどり・田中里奈・信岡朝子・菊間晴子	17	有 2023年度
4	自然観の東西比較	風土を基礎にした神と自然についての歴史的、思想的な比較研究	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究テーマに関する調査・研究・資料蒐集</li> <li>2. メンバーを中心とした研究会の開催（4回を予定）</li> <li>3. 外部の研究者による講演会の開催（1回を予定）</li> </ol>	上原雅文	上原雅文・小熊 誠・坪井雅史・前田禎彦・村井まや子・山本信太郎・中村隆文・ブライアン ルバート・角南聡一郎・矢崎佐和子 〔名誉〕伊坂青司・鳥越輝昭	12	2023年度は無
5	日中韓対照言語研究	日中韓三言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. メンバーによる研究発表</li> <li>2. 研究関係者による講演会の開催</li> <li>3. 論文の投稿・外部学会での発表の支援</li> </ol>	尹 亨仁	尹 亨仁・佐藤裕美・高木南欧子・鈴木慶夏・山田昌裕・佐藤 梓・由川美音	7	2023年度は無
6	各国近代文学の研究	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各国の近代文学の対象・方法・成果を比較・検討する</li> <li>2. 各国の近代文学（研究）の社会的・歴史的配置を研究する</li> <li>3. 「新しい文学研究」の方法論・実践を模索する</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究テーマに即した調査・研究の実施</li> <li>2. 各メンバーの関心に基づく研究会の開催</li> <li>3. 学外研究者の講演、研究交流</li> </ol>	松本和也	松本和也・熊谷謙介・水川敬章 〔非〕岡部杏子 〔学外〕中村みどり・古屋耕平・吉田遼人・山本亮介	8	有 2023年度
7	知覚認知システムの普遍性と多様性	人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共同研究遂行</li> <li>・公開講演会開催（随時）</li> <li>・研究報告会開催（2024年2月）</li> </ul>	吉澤達也	吉澤達也・前原吾朗・松永理恵・麻生典子 〔学外〕齋田真也	5	2023年度は無

8	学びの見える化	『学びの見える化の理論と実際』を読み解く会	2023年度は主に、発行された叢書『学びの見える化の理論と実際』を内外の関係者と読み解く会を行う。研究会の方法は、オンラインで行う。 ○なぜ学びを見える化するのか？ 見える化の方法論（5月13日） ○行政・非営利組織における学びの見える化実践（6月10日） ○企業・開発教育における学びの見える化実践（7月8日） ○学校における学びの見える化実践（9月9日） ○開発・病院等における学びの見える化実践（10月14日） ○学びの見える化の課題と展望（11月11日） その後は、今後の研究の方向性について協議予定。	齊藤ゆか	齊藤ゆか・太田早織・鈴木英夫 〔学外〕安藤めぐみ・森和夫・西村美東士・大瀬恵子	7	2023年度は無
9	臨床心理学研究グループ	臨床心理学に関する包括的研究	国家資格公認心理師の課題と展望の包括的研究 ・国家資格保有者の分類、属性、就業状況などの職能的な情報の収集 ・厚生労働省の公認心理師関連の政策や施策についての情報収集 ・職域の拡大や変化についての情報収集	杉山 崇	杉山 崇・瀬戸正弘・山蔦圭輔・麻生典子・森田麻登	5	2023年度は無
10	芸術（アート）と物語の交雑／発信力	広義の芸術（アート）について、物語との交雑を視野に入れて、調査・研究を行う。	1. 研究テーマに即した調査・研究の実施 2. 各メンバーの関心に基づく研究会の開催 3. 学外研究者の講演、研究交流	松本和也	松本和也・藤澤 茜・水川敬章 〔学外〕伏木 啓	4	2023年度は無
11	おとぎ話文化研究	おとぎ話とそのアダプテーションについて、特に「おとぎ話と生物多様性」の問題を中心に、文化、時代、メディアを横断する視点から研究する。	1. 研究テーマに関する資料収集と調査を行う。 2. 研究テーマに関する研究会、講演会、展覧会等を実施する。 3. 研究テーマに関する論文を発表する。	村井まや子	村井まや子・鈴木宏枝・渡部かなえ 〔学外〕菅沼勝彦・大塚奈奈絵・中脇初枝	6	2023年度は無
12	神奈川の地域と文化	横浜をはじめとする神奈川県のあるさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域（観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など）の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していく。	♪原稿をあつめたうえで検討会を実施 第1回 9月中旬（日程未定） 第2回 2月（日程未定） ♪メンバー全員が、叢書掲載の原稿の執筆に着手し、年度内に叢書を刊行する。	平山 昇	平山 昇・小熊 誠・柏木 翔・後田多 敦・島川 崇・安室 知・高井典子・崔 瑛・中林広一・山口太郎・山本志乃・小泉 諒・清水和明・平井 誠 〔非〕伊藤泉美 〔学外〕市川智生・木村悠之介・原 淳一郎・吉田律人	19	有 2024年度 予定
13	観光と美術	美術とは、人間が社会を築き、それぞれの歴史・宗教、生活、自然環境から生み出された表現である。最近では地域の歴史遺産や伝統工芸は重要な観光資源としてにわかに注目されてきてはいるが、その活動は一過性のものが多い。本研究グループは、美術（特にファインアート）や工芸デザイン分野に特化し、観光における功罪を再認識し、その正負の効果を体系化する。美術・工芸デザインの真の美的価値を評価できるアート・リテラシーを向上させることで、観光での活用を持続可能なものにすることが目的である。	1. 国内外の観光地における美術・工芸デザインの活用調査 2. 美術館における観光客誘致の取り組み事例調査 3. 学芸員の役割の変化と観光に与える影響 4. ガイドの質の向上のための高等教育の役割 5. 観光学的アプローチによる美術・工芸デザイン史の再考 6. 美術の視点からの、変えるべきもの、変えないべきものとは 7. 美術分野における観光の功罪の整理 ◎今年度は、観光によって芸術価値が発見されたり見直されたりした事例、もしくはその逆の事例を検討し、観光と美術の連関性を重点的に考究する。また、2022年度に実施された勉強会において、「観光資源」という用語への違和感が提示されたが、引き続きディスカッションを行い、それに代わりうる用語の検討を行う。	鳥川 崇	鳥川 崇・角山朋子・シェラー クインタナ 〔学外〕増子美穂・岡本岳大	5	検討中 2024年度 予定

14	言語景観と多文化共生	観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する	2022年度3月まで学内共同研究助成金を受けたため、その成果発表の準備として4月・5月に研究会を開催する。 その後、8月以降に定例研究会を開催し、今後どのようなかたちで成果を著作物にするか検討する予定である。	鈴木慶夏	鈴木慶夏・佐藤裕美・由川美音・高木南欧子・佐藤 梓 〔非〕李 忠均・小林 潔	7	検討中 2024年度 予定
15	国際日本研究	日本文化（社会や歴史、文学、美術、宗教、メディア等を含む）を国際的な視野で、学際的かつ総合的に研究すること	今年度は研究発表を6回予定しています。 5月24日（水）15：30～MMC 4020（テーマ：永久四年百首） 講師：トーマスマッコリー氏（シェフィールド大学） 6月21日（水）15：30～MMC 4020（テーマ：未定） 講師：シェラー・クインタナ（国際日本学部） 7月19日（水）15：30～MMC4020（テーマ：本人の新著『Toward a Gameic World: New Rules of Engagement from Japanese Video Games』の内容） 講師：ベン・ウェーリー氏（カルガリー大学・国際日本学部・海外招聘研究員） 10月18日（水）15：30～MMC 部屋未定（テーマ：未定） 講師：ワイイー・ロ（外国語学部） 11月22日（水）15：30～MMC 部屋未定（テーマ：未定） 講師：トリスタン・グルーノ氏（名古屋大学） 12月20日（水）15：30～MMC 部屋未定（テーマ：未定） 講師：プライアン・ルバート（国際日本学部）	ジェームズ ウェルカー	ジェームズ ウェルカー・ステファン ブッヘンベルゲル・チック ソニア・大島希巳江・ティネッコ マルコ・クリスチャン ラットクリフ・ワイイー ロ・プライアン ルバート・シェラー クインタナ・ステファン ヘープ・コオリ ウォレス	11	2023年度 は無

※活動休止中「越境する比較文化」「NCH 新聞研究会」「ヒト身体の文化的起源」

〔名誉〕名誉教授 〔元教〕本学元教授 〔非〕非常勤講師 〔学外〕学外研究者

2023年度は活動休止

名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代 表 者
越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研究を行う。	2023年度は活動休止	ステファン ブッヘンベルゲル
NCH 新聞研究会	神奈川大学が所蔵するNCH (North China Herald) の新聞 (ONLINE 版) の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究。	2023年度は活動休止	孫 安石
ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。	2023年度は活動休止	衣笠竜太

## 神奈川大学人文学研究所叢書一覧

人文学研究所

No.	年度	タイトル	出版社
1	1982	悲劇 — その諸相と人間観	神奈川新聞社
2	1984	日本文化 — その自覚のための試論	神奈川新聞社
3	1985	続 日本文化 — 伝統と近代化の再検討	神奈川新聞社
4	1986	民族と国家 — 国際関係の視点から	神奈川新聞社
5	1987	「近代」の再検討 — ポスト・モダンの視点から	神奈川新聞社
6	1988	いま・日本と中国を考える — 日中比較文化論	神奈川新聞社
7	1990	「民族と国家」の諸問題	神奈川新聞社
8	1990	ロマン主義の諸相	神奈川新聞社
9	1991	インディアスの迷宮 — 1492~1992	勁草書房
10	1992	聖と俗のドラマ	勁草書房
11	1994	秘密社会と国家	勁草書房
12	1995	ヨーロッパの都市と思想	勁草書房
13	1996	国家とエスニシティ — 西欧世界から非西欧世界へ	勁草書房
14	1997	芸能と祭祀	勁草書房
15	1998	笑いのコスモロジー	勁草書房
16	1999	ロマン主義のヨーロッパ	勁草書房
17	2000	ジェンダー・ポリティクスのゆくえ	勁草書房
18	2001	日中文化論集 — 多様な角度からのアプローチ	勁草書房
19	2002	歴史と文学の境界 — 〈金庸〉の武俠小説をめぐる	勁草書房
20	2003	「明六雑誌」とその周辺 — 西洋文化の受容・思想と言語	御茶の水書房
21	2004	新しい文化のかたち — 言語・思想・くらし	御茶の水書房
22	2005	中国における日本租界 — 重慶・漢口・杭州・上海	御茶の水書房
23	2006	世界から見た日本文化 — 多文化共生社会の構築のために	御茶の水書房
24	2007	在日外国人と日本社会のグローバル化 — 神奈川県横浜市を中心に	御茶の水書房
25	2008	表象としての日本 — 移動と越境の文化学	御茶の水書房
26	2009	ジェンダー・ポリティクスを読む — 表象と実践のあいだ	御茶の水書房
27	2009	中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産	御茶の水書房
28	2010	世界の色の記号 — 自然・言語・文化の諸相	御茶の水書房
29	2011	〈悪女〉と〈良女〉の身体表象	青弓社
30	2011	グローバル化の中の日本文化	御茶の水書房
31	2012	植民地近代性の国際比較 — アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験	御茶の水書房
32	2012	戦後日本と中国・朝鮮 — ブランゲ文庫を一つの手がかりとして	研文出版
33	2013	色彩の快 — その心理と倫理	御茶の水書房
34	2013	先住民運動と多民族国家 — エクアドルの事例研究を中心に	御茶の水書房
35	2014	近現代中国人日本留学生の諸相 — 「管理」と「交流」を中心に	御茶の水書房
36	2014	近代日本の宗教論と国家 — 宗教学の思想と国民教育の交錯	東京大学出版会
37	2015	〈68年〉の性 — 変容する社会と「わたし」の身体	青弓社
38	2015	文化を折り返す — 普段着でする人類学	青娥書房
39	2016	破壊のあとの都市空間 — ポスト・カタストロフィーの記憶	青弓社
40	2017	帝国とナショナリズムの言説空間 — 国際比較と相互連携	御茶の水書房
41	2017	新・新猿楽記 — 古代都市平安京の都市表象史	現代思潮新社
42	2018	中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」	東方書店
43	2018	自然・人間・神々 — 時代と地域の交差する場	御茶の水書房
44	2019	男性性を可視化する — 〈男らしさ〉の表象分析	青弓社
45	2020	近世村落の領域と身分	吉川弘文館
46	2021	明治から昭和の中国人日本留学の諸相	東方書店
47	2021	アフリカン・アメリカン児童文学を読む	青弓社
48	2022	学びの見える化の理論と実際 — 教育イノベーションにむけて	勁草書房
49	2022	A Sense of Plausibility in vision and music perception	朝倉書店
50	2023	動物×ジェンダーマルチスピーシーズ物語の森へ	青弓社
51	2023	翻訳としての文学 — 流通・受容・領有	水声社